

院長特別寄稿

「新型コロナウイルス感染症に想う」

正直、医療関係者は新型コロナウイルス感染症で四苦八苦しています。多くの方は、あたかもウイルスがヒト社会を脅かしているように考えています。また、世界の指導者の一部は戦争に例え、闘いを宣言している状況です。多くの情報が氾濫し混沌とし、毎日報道される内容を見続けていると、感染者数、死亡者数などのカウントが無意識のうちに不安を煽ります。

こんな状況を見直すために

山本太郎（長崎大学 熱帯医学研究所 教授）著

○「感染症と文明 ー共生への道」 岩波新書 2020年5月15日 第7刷発行

○ 雑誌世界7月号 「パンデミック後の未来を選択する ウイルスの目線からの考察」

p. 29-39

を是非読んで頂きたい。

山本氏は「健康と病気は、生物学的、文化的資源をもつ人間の集団が、生存に際し、環境にいかにか適応したかという有効性の尺度である」

いいかえれば、病気とは、ヒトが周囲の環境にまだ適応できていない状態を指す。

人類は、自らの健康や病気に大きな影響を与える環境を、自らの手で改変する能力を手に入れた。それは開けるべきでない「パンドラの箱」だったのだろうか。

多くの災厄が詰まっていたパンドラの箱には、最後に「エルピス」と書かれた一欠片が残されていたという。古代ギリシャ語でエルピスは「期待」とも「希望」とも訳される。

・・・パンドラの箱の物語は多分に寓意的であるが、暗示的でもある。
と説明しています。

ウイルスの目線で考えると見える、もう一つ大切なことに、ウイルスは宿主の根絶を意図していないということがある。ウイルスは、自らの複製に宿主を必要とすると述べた。その宿主を殺すことはウイルスにとっても不利となる。そうしたなかで、私たちがウイルスの絶滅を目指すことは、危険な考え方とさえなる。根絶を目指して強い淘汰圧をかけられたウイルスは、生き延びるために進化する。

読み進めると、ウイルスが哺乳動物において胎児を保護する役割を果たす可能性を示唆し、その例として妊娠時、胎児の拒否反応を回避し胎盤形成に大きく関与しているのがウイルスだと。また産業革命、インドのカースト制度に感染症の流行が影響したなど興味深い話しが書かれています。

感染症は社会のあり方がその様相を規定し、流行した感染症は時に社会改革の先駆けとなる。そうした意味で、感染症の汎世界的流行はきわめて社会的なものとなる。その時代、時代を反映したものとして、という意味ではあるが、... 歴史が示す一つの教訓かもしれない。 ... 希望を未来へとつなげていくのは私たち自身でしかない。

考え方のベクトルを変えるだけで希望が湧いてきます。